横浜ルネサンス

Yokohama Renaissance

Number 6

特集

横浜と英語

横浜を詠む

Who's Who in YOKOHAMA

横浜を聴く

濱 Yokohama いいこと、いい心の、いっぱい。

横浜信用金庫

ごあいさつ

横浜信用金庫理事長 斎藤 寿臣

特集「横浜と英語」のインタビューで中田市長は、英語について「やっかいなもの」と語っています。「英語を使いこなせたらいいのだけれど、なかなか思うようにならない」という多くの日本人に共通する悩みを市長なりに表現されたものです。開港によって海外文化の流入口となった横浜は、もちろん英語とも密接に関連しています。『横浜ルネサンス』第6号では、この「やっかいな」存在である英語と横浜との関係を多面的に表現することを試みました。

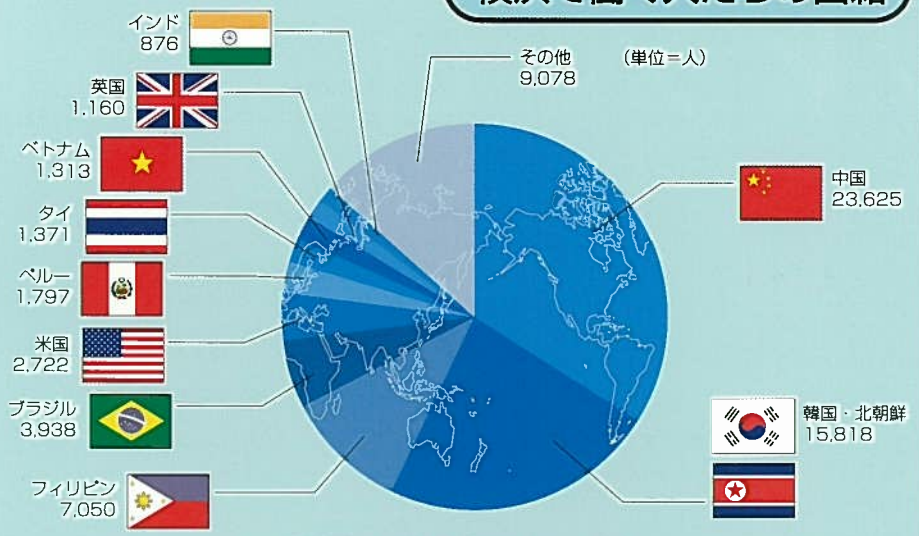
定番の浜っ子インタビューの他に、 黛まどかさんの俳句と横浜の風景写真をコラボレートした「横浜を詠む」、戦後日本の歌謡曲のルーツを進駐軍クラブに求めた研究書の著書、東谷護さんによる「横浜を聴く」など新しい企画も掲載しました。『横浜ルネサンス』第6号、お楽しみいただければ幸いです。

目次

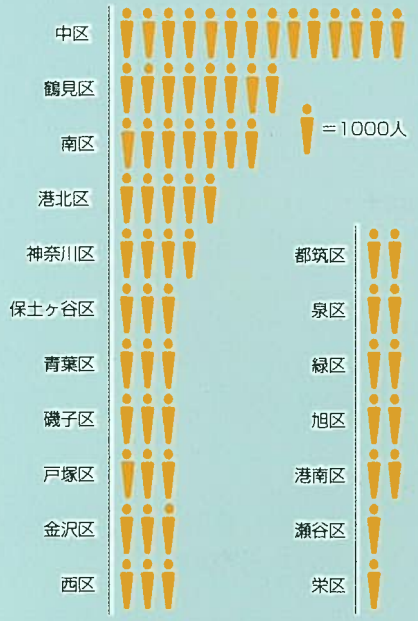
横浜絵解き図絵／横浜で働く人たちの国籍 ……2
目次／理事長挨拶 ……3
特集 横浜と英語
市長さんの英語舞台裏 中田 宏 ……4
ガイドの達人の心得 嶋田昌子 ……6
英語感覚で見たヨコハマの散策小径 バーリット・セービン ……8
英語で説明できますか ……10
セントジョセフの華麗な人脈 ブーン大山、ジョージ小山 ……12
YMCAでの英会話教育事情 山根誠之 ……14
明治の耳に聞こえた英語 ……16
歴史的大人物の英語力 岡倉天心 ……18
横浜を詠む／黛まどか〈写真：森日出夫〉 ……20
Who's Who in YOKOHAMA／横浜スローフード協会会長 松信 裕 ……22
株式会社たまき社長 玉置晴美 ……24
横浜を聴く／東谷 護 ……26
横浜ジェリービーンズ倶楽部通信 ……28

◎横浜絵解き図絵

横浜で働く人たちの国籍



横浜市外国人登録人口（2005年8月末現在）



横浜市区別外国人登録人口（2005年8月末現在）

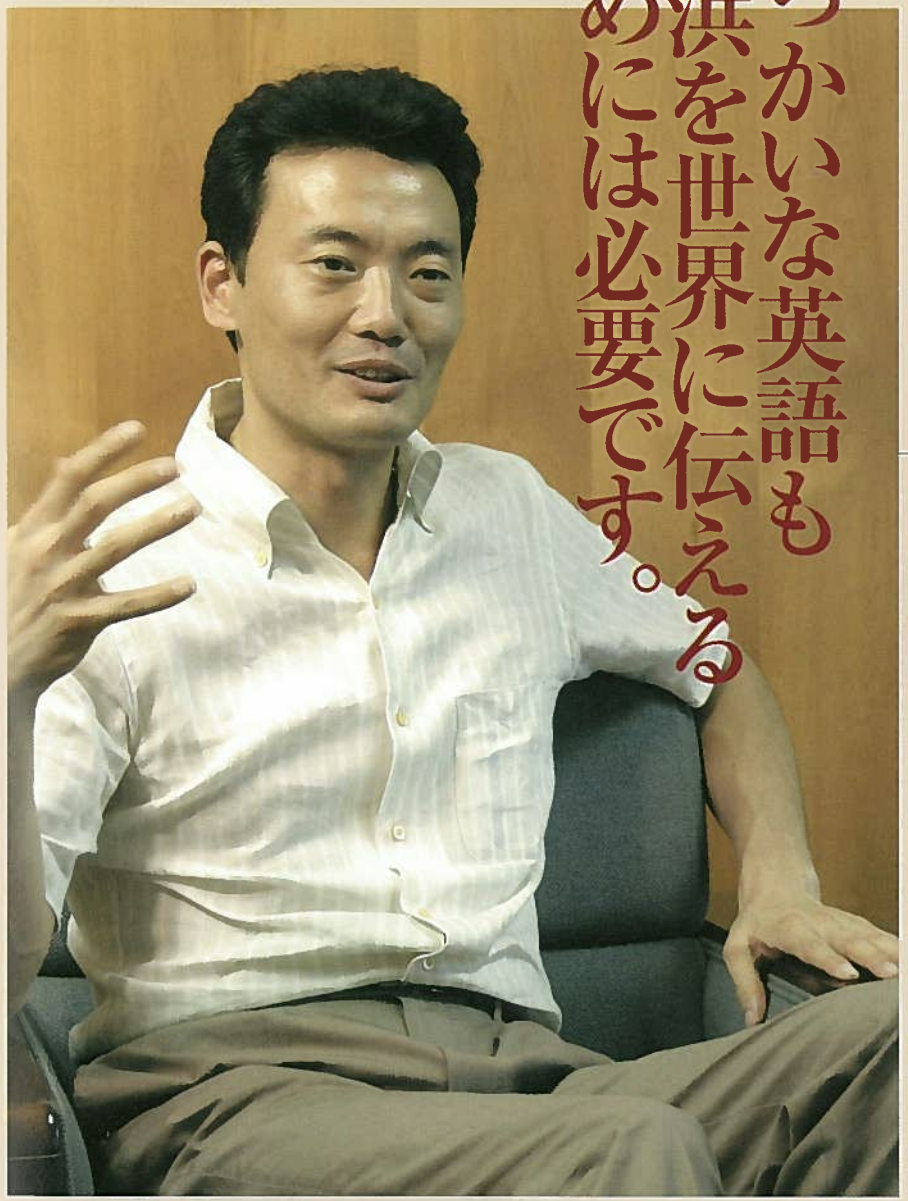
横浜市区別外国人登録人口（2005年8月末現在）によると、現在横浜には無国籍を含めて151カ国68,748名の外国人の方が在住しています。
いかに横浜が国際色豊かな街であるかがこの数字からうかがえます。
外国人登録数が多い区ベスト5は、中区、鶴見区、南区、港北区、神奈川区の順番で、逆に少ないのは、栄区、瀬谷区、港南区、旭区、緑区の順番です。
横浜駅を中心とした沿岸部に在住される方が多い傾向が見られるのは、交通の便がよく、また商業機会や就業機会が多いためなのでしょう。

出所：横浜市総務局行政部統計解析課「横浜市統計ポータルサイト」より。

特集
横浜と英語
市長さんの英語舞台裏

やっかいな英語も横浜を世界に伝えるためには必要です。

横浜市
中田 宏市長



プロフィール・中田 宏（なかだ ひろし）
1964年、横浜市出身。青山学院大学経済学部卒業後、（財）松下政経塾に入塾。92年日本新党旗揚げに参画。参議院議員秘書、党報道室長を経て、93年衆議院選挙に立候補し、トップ当選。3期連続当選後、2002年横浜市長選挙に初当選。著書に『なせば成る 偏差値38からの挑戦』『国会の掟』など。

英語は私にとって「やっかいなもの」と感じているんです。

どういうことかというと、実際に社会に出てコミュニケーションを意識したときの英語と、受験勉強の中で学ぶ英語とのギャップというものが「やっかいなもの」の原因なんだと思います。

花マルちょっと手前の英語力

英語教育に熱心な青山学院大学出身ということもあって英語が上手であると思われがちで、ますます「やっかい」なんですが（笑）、実は得意ではないという一人なんです。「ここはonなのかatなのか、それともinなのか」と考えこんでしまって、立ちどまってしまうということは多々あります。

用意した原稿を暗記したり、読みながらスピーチするということはできます。しかし、今日もさきほど世界各国の方々が集まる会議でスピーチをしたのですが、ハワイからいらした人に「市長のスピーチに感激した」と言っていただいて、「どうもありがとうございました」と答えるくらいはできても、話が深くなっていくとだんだんわからなくなってしまう。

ですから、自分では「多少難あり」「もっとがんばりましょう」というくらいだと評価しています。

松下政経塾でも英語のトレーニングはやったのですが、今ではあの時もう少しやっておけばよかったと思います（笑）。

羊の代わりに英語を〝数えながら〟

とはいえ練習はひそかにやっています。仕事柄、横浜の歴史を学ぼうだとか、税制を学ぼうというときと比べて、英語を学ぶ日常の環境が整っているかというと、必ずしもそうではありませんが、自分のスピーチした内容については、別の機会でも使えるようによく消化するといった努力をしています。

たとえば……

Ladies and Gentlemen. I am Hiroshi Nakada, Mayor of the City of Yokohama.

という自己紹介はどこでも使えますが、衆議院議員だったという経歴を伝える

I was a member of The House of Representatives of Japan for nine years.

といったフレーズもよく使いますから、同じようによく消化しないといけません。

日常的には英単語を覚える努力もしています。単語力は重要です。「豆単」ではありませんが（笑）、電子辞書の履歴機能などを利用して、スピーチで使った単語を忘れないようにしています。

この二年くらいは寝る前に数えるのは羊ではなく、英単語です。今日はこの三つ、という風に絞って、頭の中で唱えながら眠るんです。

市長になってすぐの頃は市の数字、たとえば市の借金や税収入、職員数を唱えながら眠っていました。はやく市のことを徹底して頭に入れなければならかったものですから。今は英単語ですね。市の職員には何人か外国人がいて、スピーチのチェックをしてもらうほかに、私の英語の話し相手になってもらうこともあります。

小学校からの英語教育を検討中

横浜市の政策としては、横浜教育改革会議が小学校から英語教育を導入するという答申を出しています。これを受けて市教育委員会が検討を進めています。市立小学校約三五〇校すべてで行う方針ですから、実現すれば大きな変化です。

横浜にはさまざまな国から人が集まっていますから、これからは外国のことを学ぶ、知るということと並行して、横浜ないしは日本のよさを伝えるために英語が重要だと考えています。（談）▼

特集
横浜と英語
ガイドの達人の心得

横浜人として外国人をもてなすコツ

横浜シティガイド協会会長
嶋田昌子さん

プロフィール・嶋田 昌子（しまだ まさこ）
1940年横浜市生まれ、82年「横浜の洋館を愛する会」を創立。後に「ヨコハマ洋館探偵団」と改称。92年「横浜シティガイド協会」を創立。会長に就任。

日本近代の曙光を見続けてきた街、横浜。外国人との出会いなくして日本の近代化は達成されなかったといっても過言ではない。そして、そういった外国人との触れあいは今もこの街のあちこちで生まれている。横浜シティガイド協会は、横浜へやってくる人びとに街を紹介する事業を十年以上も続けている。

「横浜シティガイド協会は今から一二年前、洋館の保存運動を母体として発足しました。それまで洋館にしぼって勉強会などを続けていましたが、もっと広く横浜という街そのものを勉強したりガイドして、在住歴の浅い市民や観光客に横浜を知ってもらう、好きになってもらうという運動を始めたんです。洋館探偵団の「団長」は今も続けながら、横浜のガイド役の育成や、一風変わった地図の製作などに携わっています」。

日本語学科の学生はカタコト

ワールドカップや横浜トリエンナーレといった国際的なイベント、会議が増えるにつれ、外国人をガイドする機会も増え続けているという。

「横浜はたくさんの国と姉妹都市提携を結んでいますから、さまざまな国から人がやってきます。なにしろ２００２年の日韓共催ワールドカップに参加したすべての国の人が住んでいるという街ですから。英語に限らず外国語でガイドしてほしいという需要も年々多くなってきました。先日も横浜市と姉妹都市提携を結んでいるオデッサ（ロシア）の大学の日本語学科の学生をガイドしました。セルゲイ・エイゼンシュテインの有名な映画『戦艦ポチョムキン』の舞台となった街から来てくださったお客さまです。日本語学科の学生ですから日本語は達者なのかと思ったら、まったくのカタコトで困りました。本当にいろんな方がこの街にやってくるのだなと実感しました。次はドイツの建築家の方をガイドする予定です」。

国際都市横浜らしいエピソードだが、外国人をガイドするときに横浜のこと、日本のことを理解してもらうには相当な工夫が必要だということがわかる。

本質的な違いをずばっと話す

「長からぬ時間の中で日本の文化を紹介するのは大変なことですが、そういうときによくお話しするのが西洋と日本の住宅の違いです。西洋、特にヨーロッパでは何十年、何百年建っているという石造りの建築物にごく普通の人が住んでいます。それにたいして伝統的な日本の家というものは全部、木でできたものですよね。部屋をくぎっているのは障子で、つまり紙です。私たちは植物でできた家に住んでいるのです。私たちは植物という、石とはまったく異なる住宅に住んでいるんだというような、単純だけれど本質的な違いを簡潔にまとめてお話するととても喜んでもらえます」。

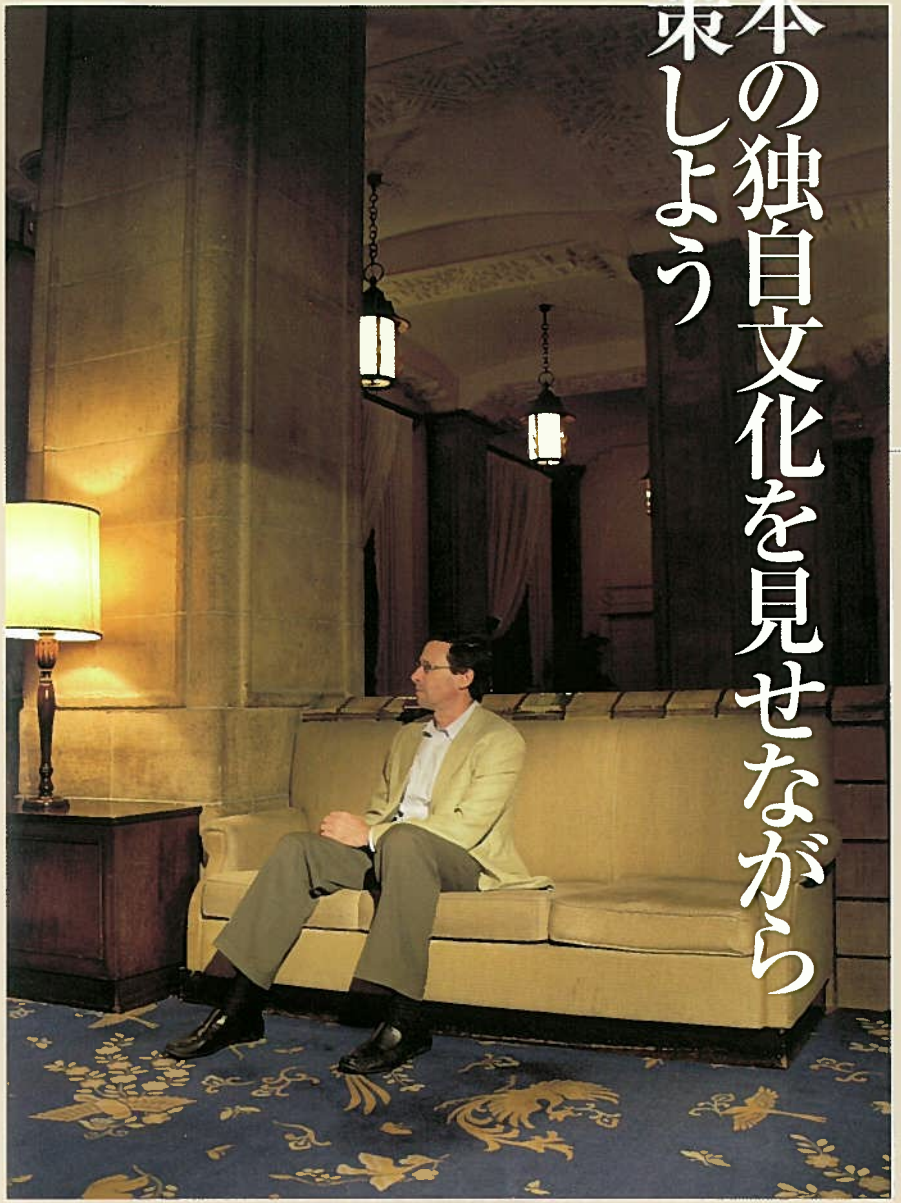
金沢八景やみなとみらい、山下公園、中華街など観光スポットにこと欠かない横浜だが、外国人に人気のスポットはどこなのだろうか。

「一番人気があるのはやはり三溪園ですね。第二銀行頭取や横浜興信銀行頭取、帝国蚕糸株式会社社長などを歴任した実業家である原三溪が収集した美術品を楽しむことができる名園ですが、庭園や古美術、神社仏閣、お茶など、日本文化を一度に味わうことができるということで、外国の方は大喜びしてくれます。もちろん日本人が訪れても面白い名園です。知っているようで知らないことというのは多いですから。歴史を知ること、生活感覚に敏感になること、そういうちょっとした勉強や工夫をすることによって、街歩きはこれ以上ない楽しみになるはずです」。

特集
横浜と英語
英語感覚で見たヨコハマの散策小径

日本の独自文化を見せながら散策しよう

バーリット・セービンさん



プロフィール・Burritt Sabin(バーリット・セービン)
1953年、米ニューヨーク生まれ。米海軍のフリゲート艦の乗組員として75年に横須賀基地に赴任。その後、日本を紹介する英字誌編集長などを歴任。現在、ジャパンタイムズなどにエッセーを執筆するほか、横浜国立大学などの非常勤講師。横浜市中区在住。

名所の多い横浜だが、外国からのお客様に喜んでもらうには、どこを見せてあげるのが一番いいのだろうか。日本在住三〇年のジャーナリスト、バーリット・セービンさんに聞いてみた。セービンさんはウィスコンシン大学マディソン校を卒業後、米海軍に入り、横須賀基地に赴任した。退役後もそのまま横浜に住みついてしまったという大の横浜通である。

「横浜にはみどころがたくさんあって、私も外国から友人などを迎えるときには色々と迷いますが、三渓園が一番そつのない選択でしょうね。ただ、三渓園が日本文化の粋を集めたようなところであるには違いないのですが、もうちょっとひねりの利いたホストでありたいと思ったら、ゲストと一緒に私のお気に入りの小径を散歩することにしています」。

お気に入りは見尻坂界隈

セービンさんのお気に入り散歩小径は外人墓地周辺に集まっていると言う。中高年のお客様には特にお勧めだという。

「一番好きなのは、見尻坂なんです。できれば夜の散歩をお勧めします。夜景がきれいで、元町プールが宝石のように輝いて見えます。まずは十番街のビアガーデンでビールを飲む。ほろ酔い気分で外人墓地を左手に見ながら坂を降ります。外人墓地では墓石をよく見てください。宗派によって形がちょっとずつ違うのがわかると思います。外人墓地は神戸などにもありますが、横浜のものは街と近いんですね。

ヒマラヤ杉もなかなか珍しい。私は長崎の佐世保にいたこともあるのですが、この見尻坂はあの有名な長崎市内の坂と雰囲気が似ていますね。県立神奈川近代文学館や大佛次郎記念館も、日本に特別な関心がある方には面白いとは思いますが、残念ながら英語での案内が少ないのです。

帰りは海岸通を歩いて、ホテルニューグランドを案内してみてはどうでしょうか。ゆっくりコーヒーでも飲んで酔いを覚まします。最高ですよ」。

では若い人はどんな横浜を喜ぶだろうか。

「若い人、特に女性ならば元町でのウィンドウ・ショッピングが楽しいでしょう。もっともそれは万国共通のようです(笑)」。

外国にはない日本独自文化

三渓園のほかにも日本的なものはもっとあるとセービンさんは言う。

「野毛のゴチャゴチャした雰囲気は独特だと思います。お勧めはジャズ喫茶の「ちぐさ(☎045・241・7301)」で決まりです。巨大なステレオがあって、お客さんは眉間に皺を寄せながら、じっと聞いている。こんな光景は外国にはありません。日本独自の文化と言って差し支えないでしょう。定休日は月・火となっているので注意が必要ですが。

日本独自といえば伊勢佐木町の商店街もそうなんですよ。ストリート・ミュージシャンが、安全に夜通し歌えるという環境はあまりありません。彼らがほとんどお金を要求してこないというのも面白い。純粋に自分の歌を聞いてもらいたいということなのでしょう。

それと、意外なことだと思いますが、友人をマイカルに連れて行くと結構、面白がります。ああいうアジア的雰囲気のスーパーはないですからね(笑)。日本の普通の人びとの食文化もよくわかるわけですからね。

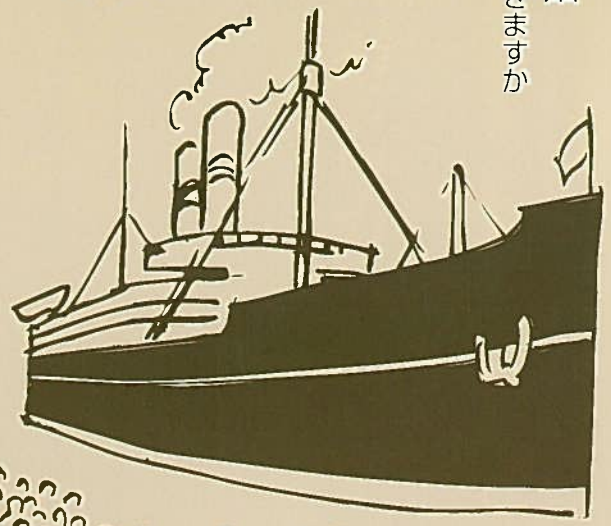
それとみなとみらいの万葉倶楽部も。北欧の方にはサウナの文化がありますが、あれだけさまざまなタイプのお風呂が集まっているという施設は独特です。日本人はお風呂が大好きなんだということがよくわかると思います」。▼

特集
横浜と英語
英語で説明できますか

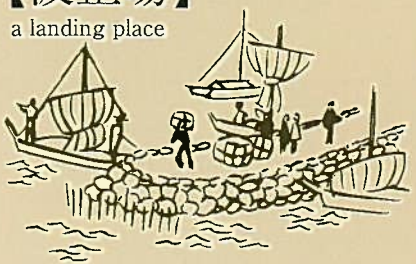
日本文化を英語で伝える時意外に困る単語集

バーリット・セービンさん監修

私たちにとっては空気のようにあたり前のことも、それを外国からのゲストに伝えるとなるとやっかいだ。とっさには伝えにくい日本文化をどう翻訳するのか、バーリット・セービンさんに教えてもらった。▼



【波止場】
a landing place



【卓袱屋(ちゃぶや)】
originally a chophouse and later a club with dance floor and private rooms

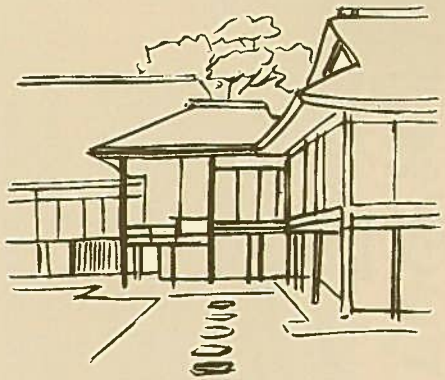
【張り見世(はりみせ)】
a row of seated prostitutes on display for kuruwa patrons

【郭(くるわ)】
a licensed quarter

【相輪(そうりん)】
the cylindrical metal column at the top of pagoda

【大名】
during the Tokugawa Period a feudal lord in possession of a fief with a yield of 10,000 koku of rice or more; a koku is a unit of capacity equivalent to 5.119 U.S. bushels.

【～丸】
a suffix attached to a ship's name (e.g. Hikawa-maru)

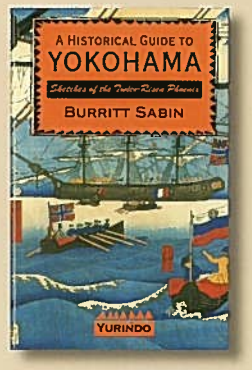


【数寄屋造り】
a style of residential architecture incorporating such elements of the tea ceremony room as round posts and earthen walls and an absence of ornamentation.

【書院造り】
a style of samurai residential architecture that originated in the late Muromachi Period with characteristic features such as shoji, square posts, tatami floors and tokonoma.

【床の間】
an alcove

【障子】
a paper sliding door

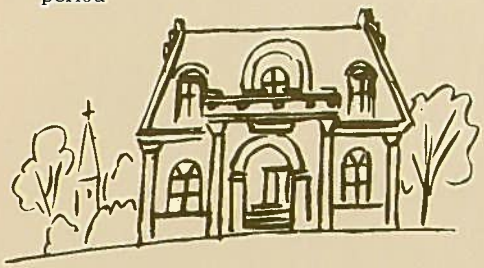


バーリット・セービン著
『A Historical Guide to Yokohama』
有隣堂2002年より。

【将軍】
a short form of seii-tai-shogun, "barbarian-subduing generalissimo," a post first granted by the emperor in the eighth century. The imperial goverment appointed Minamoto-no-Yoritomo seii-tai-shogun in 1192, from which time the title meant head of samurai government. After Ieyasu unified the country, shogun became a hereditary title of the Tokugawa. There were 15 Tokugawa shoguns, the first being Ieyasu (1542-1616) and the last Yoshinobu (Keiki; 1837-1913).

【浪人】
a masterless samurai

【尊王攘夷】
"Revere the Emperor, Expel the Barbarians," the battle cry of the Royalist party during the last years of the Tokugawa period



【～座】
a theater

【畳】
woven rush mats for floors

【襖】
a framed paper sliding door

特集
横浜と英語
セントジョセフの華麗な人脈

ゲーム感覚の強い英語を使うと、横浜はもっと国際都市になる

セントジョセフ校友会会長
ブーン 大山さん(右)
セントジョセフ校友会副会長
ジョージ 小山さん(左)

セントジョセフ・インターナショナル・スクール
横浜市民に「センジョ」と呼ばれ親しまれたセントジョセフ校は、フランスに本部を置くカトリック系マリア会による布教活動の一環として、横浜に居住する外国人子弟の教育目的で1901年に設立された(2000年閉校)。実際の運営管理の本拠地だった米国の学校制度を採用し、8年間と4年間の制度、9月始業6月終業、休日もアメリカの祝祭日だった。1学年30余名の1クラスで全校4〜500名の男子校。

かつて本牧にあった米軍キャンプは「フェンスの向こうのアメリカ」と言われていたが、横浜に居住する外国人の子弟教育のためのいくつかのアメリカンスクールにも「アメリカ」が存在した。その一つ、セントジョセフ校のOB会会長ブーン大山氏(58)と副会長のジョージ小山氏(55)に同校のお話をうかがった。

センジョの共通語としての英語

大山さんが「学生生活のすべてがアメリカ文化でした。デートも喧嘩も、アメリカ映画で観る若者と同じだったなぁ」と振り返れば、小山さんも「たとえば、ダンスパーティにタキシードを着用するとか、パートナーの女性を迎えに行く時に相手用の花だけでなく、彼女のお母さんへのブーケも準備する……。そんなエチケットやレディファーストのマナーは自然に身につきました」と解説してくれる。

米国式カリキュラムのため、卒業生の半数はアメリカの大学に進学したという。現在のOB会の会員2000名も半数は海外在住で活躍しているが、国内ではE・H・エリック、岡田真澄、ミッキー・カーチス、ザ・ゴールデンカップスのエディ藩らが、外人タレントの草分けとして人気を集めた。生まれた環境だけでなく、彼らを育んできたセンジョが、日本の中のアメリカだったからこそ、彼らの個性が注目を浴び、時代に受け入れられたのだろう。

「自分たちの年代は生徒数も多かったけど、50カ国以上の国籍の生徒がいました。それも混血が多かったから親の国籍も様々で、家では両親それぞれの母国語、外では日本語、学校では英語という具合に数カ国語を話す生徒は沢山いました」と大山さん。小山さんも「とにかくいろんな言葉が溢れていたけど、言葉は自然と耳に入ってくるコミュニケーションの手段。ちょうど赤ん坊が言葉を覚えるのと同じで、文法なんかは後で学べばよかった」と言う。

英語は前向き思考を養う

しかし、だからこそ他国言語の中では英語が唯一共通のコミュニケーションだった。もちろん授業はすべて英語だったし、校内では英語以外の使用は禁止されていた。そして「いろんな人種と言葉と文化が入り乱れていたからかな? そこには人種差別なんて意識はまったく存在しなかった」という。言葉が通じない環境でコミュニケーションに努力することで、人種の違いや文化の違いを自然に認め合う土壌ができるのかも知れない。

OBには中華街や元町などの経営者も多い。「子供たちに国際性を身につけさせるためには英語力が必須と考えた教育熱心な中華街の親たちは、中華学校でなくセンジョを選びました。輸入商品を多く扱い、外国人顧客も多い元町の事業主は、ビジネスの必要から子弟をセンジョに通わせた」のだと大山さんはいう。

では、子供の頃から英語という言葉の中で育つことは何か影響を与えるのだろうか? 「人生に積極的になりますよ。英語には曖昧な表現が少ないし、会話の最初に自分の意志を表現するのが英語の構文。たとえ上手くいかないことがあっても、英語で思考すると、またチャレンジしよう……って気持ちが沸いてくる」と大山さん。「日本語に比べたら英語はある意味ゲーム感覚の強い言葉。負けても勝っても、さあ次も頑張ろう……ってニュアンスがあるんですよ。そういう感覚や思考が国際人には必要じゃないかな……。浜っ子同士が英語で会話して思考するようになったら、横浜はもっと国際都市になりますよ」と小山さん。現在英語教育に携わる両氏の回答は明快だった。

特集
横浜と英語
YMCAでの英会話教育事情

横浜YMCA
山根誠之総主事

トレーニングではなくエデュケーションを

プロフィール・山根 誠之（やまね せいし）
1941年熊本市生まれ。日本YMCA同盟、熊本YMCA総主事を経て、98年から横浜YMCA総主事。横浜YMCAでは、語学教育をはじめ、ウエルネス・専門学校・オルタナティブ・保育・高齢者福祉、国際・地域奉仕活動など、地域に根ざした活動を広く行っている。

横浜のYMCAはおよそ一二〇年の歴史を持つ横浜でも古い伝統を誇る組織だ。キリスト教の精神に触れた山下町の海岸教会の青年たちによって1884（明治17）年につくられた。英会話教室の先生はのちに明治学院大学の教頭になるワイコフという宣教師。彼らは自力で英語の教科書を作り、英語教室を設立した。

そんな横浜YMCAの伝統を支えるモットーは「地の塩」のような存在。「地の塩」というのは「マタイによる福音書」に登場する言葉だ。自分を主張しないけれども世の中の役に立つ存在であり続けていきたい、という考え方を山根誠之総主事は穏やかに説明してくれた。ごく自然に聖書の言葉が出てくるところに敬虔なキリスト教徒らしさが漂う。

言葉を通じて他者を思う

そんな横浜YMCAの英会話教室を支えているのは世界教会主義＝エキュメニズム（Ecumenism）という考え方だ。狭義にはキリスト教を含む諸宗教間の対話と協力を目指すことを意味するが、その精神は「多様な言語や文化を持つ人たちを愛する、自分を考える前にまず相手のことを思いなさい」ということだ。

「たまたまYMCAはプロテスタントの信者が始めたものですが、私たちの英語教育では、そうした流れに沿って言語を通じて他者との関係を築いていくということを重んじます」。

YMCAでは英会話教育に限らず、さまざまな教育の場の基礎にこの考え方をおいている。そしてそのために、横浜YMCAでは原則的にひとつのクラスを同じ教員が一年間受け持ち、責任を持って成長を見守っていくことになっている。より深いコミュニケーションを目標としている姿勢がうかがえる。

「英会話教室をビジネスとして考えるとライバルはたくさんいますが、ほとんどは英語のトレーニングに終始している。そこがYMCAでの英語教育との大きな違いです。トレーニングが重要であることは言うまでもありません。私たちも基礎的なトレーニングには力をいれています。しかし、私たちはトレーニングを超えて、英会話の勉強が教育の場であるということを目指しているんです」。

丁寧で地道な地の塩の活動

横浜YMCAは地域が求めていることに応えるということも重視している。言うまでもなく、横浜は国際会議や国際的なイベントが多い。また、ホームステイや留学といった形で世界中の国から若者が横浜に集まってくる。

そんな背景があるせいか、YMCAには英語に限らず中国語、韓国語など言葉がらみの相談にのってほしいという要望が多い。「子どもをバイリンガルに育てたいという親御さんの要望もほかの地域より多い」という。

また、「オルタナティブ学習」といって、さまざまな理由で公教育以外の学習の場を選ぶ子どもたちの受け入れも行っている。「グローバルキンダーガルテン」という就学以前の幼児を対象にした教室もある。

総合的なエデュケーションを目指しているということがよくわかる。

ほかにもエイズ患者や障害児への理解を深める活動や、タイやミャンマーといった国々で国際協力・交流活動も行っている。

「昨年、私たちは創立一二〇周年を迎え、さまざまな記念行事を催しましたが、これからもことさら自らの存在を主張するのではなく、丁寧で地道な活動を通して横浜という街がより住みよい街となるよう『地の塩』としてがんばっていきたいと思います」。

都々逸に残された英語の記憶

特集
横浜と英語
明治の耳に聞こえた英語

絵左：五雲亭貞秀画〈生写異国人物亜墨利加女官翫板遨之図〉〔1860（万延元）年〕、上：クリペ作成〈横浜絵図面〉〔1865（慶応元）年〕、右：五雲亭貞秀画〈横浜休日阿蘭人遊行〉〔1861（文久元）年〕。資料提供：横浜開港資料館。参考：斎藤兆史『英語襲来と日本人―えげれす語事始』（講談社）2001年。

私たち日本人はいったいいつ、どのようにして「英語」というものと出会ったのだろうか。

江戸時代の日本人にとっての「外国語」とはまず第一にオランダ語であり、第二にポルトガル語だった。当時のオランダとスペインは植民地大国であった。今でこそ世界共通語とも言われる英語は、イギリスとその植民地であったアメリカで使われていたに過ぎない。英語が日本に限らず、イギリスやアメリカの外へと拡散するのは、両国が植民地の拡張と経営で覇権を握り始める一九世紀のことである。いわば世界史で言うところの植民地主義の担い手の変化を反映していたわけである。

1808年、イギリス船フェートン号が、オランダ国旗を掲げて長崎港に入港した。彼らはオランダ人を人質にして、薪水と食料を日本人に要求したのである。幕府はこの事件に驚嘆し、それまでは長崎県の出島で主にオランダ人やポルトガル人の商人の通訳をしていた通詞（通訳）たちは、大慌てで英語を勉強しはじめた。

「明治と英語」というコンビネーションで私たちがすぐに思いつくのは、ジョン万次郎（1827～98）だろう。ジョン万次郎は1841年、一四歳のとき、漁の最中に嵐にあって遭難し、鳥島に漂着。国力の増加にともなって太平洋上で活動しはじめていた、アメリカの捕鯨船に救助された。そのままアメリカに住みつき、当地の教育を受けたジョン万次郎は九年間アメリカに滞在したのちに帰国、幕府に徴用された。ただし、ジョン万次郎は英語の優れた話者であったに違いないが、優れた教育者であったとは言えないようである。彼が土佐藩士に英語を教える際に作った教材はこんな風である。

ワン、ツウ、テレイ、ソワポゥ、パッイワ、セキシ、セベン、アイテ、ナイフ、テン

多少こちらが好意的にならなければ、英数字の読み方を解説しているということはわからないに違いない。「ソワポゥ」「パッイワ」というのは、いったいどこから来たのかと問いただしたくなる。

ともあれジョン万次郎に代表される多くの先人達の苦労の末に、オランダ語、スペイン語に代わる「外国語」としての「英語」は日本に「輸入」された。明治新政府は大量の外国人を教師として雇い、東京帝国大学での講義はほとんどが英語になった。

ただし、それはあくまで高等教育を受けることのできた政治家や学者、官僚に限られたことだった。庶民が英語というものと出会うためには、明治時代の後半まで待たなくてはならない。

記録によれば、明治時代の犬の名前には「カメ」というものが多いという。外国人が犬を見て、"Come, Come!"と呼ぶのを聞いて、勘違いしたのだろう。なんとも微笑ましいが、庶民と英語との交流はおおよそこんなふうであったのだろう。新政府による欧化政策が成功するにつれ、英語は急速に庶民に浸透した。それはこんな都々逸（どどいつ）が流行したことを見ても、よくわかる。

「待夜はロングとおもふてゐるに
あへばショルトわかれした」

「ブロード世界もぬしゆえわたしやナルロウくらすよこの頃は」

「ぬしのゲレート気をあんじるよスモールおんなのこゝろでは」

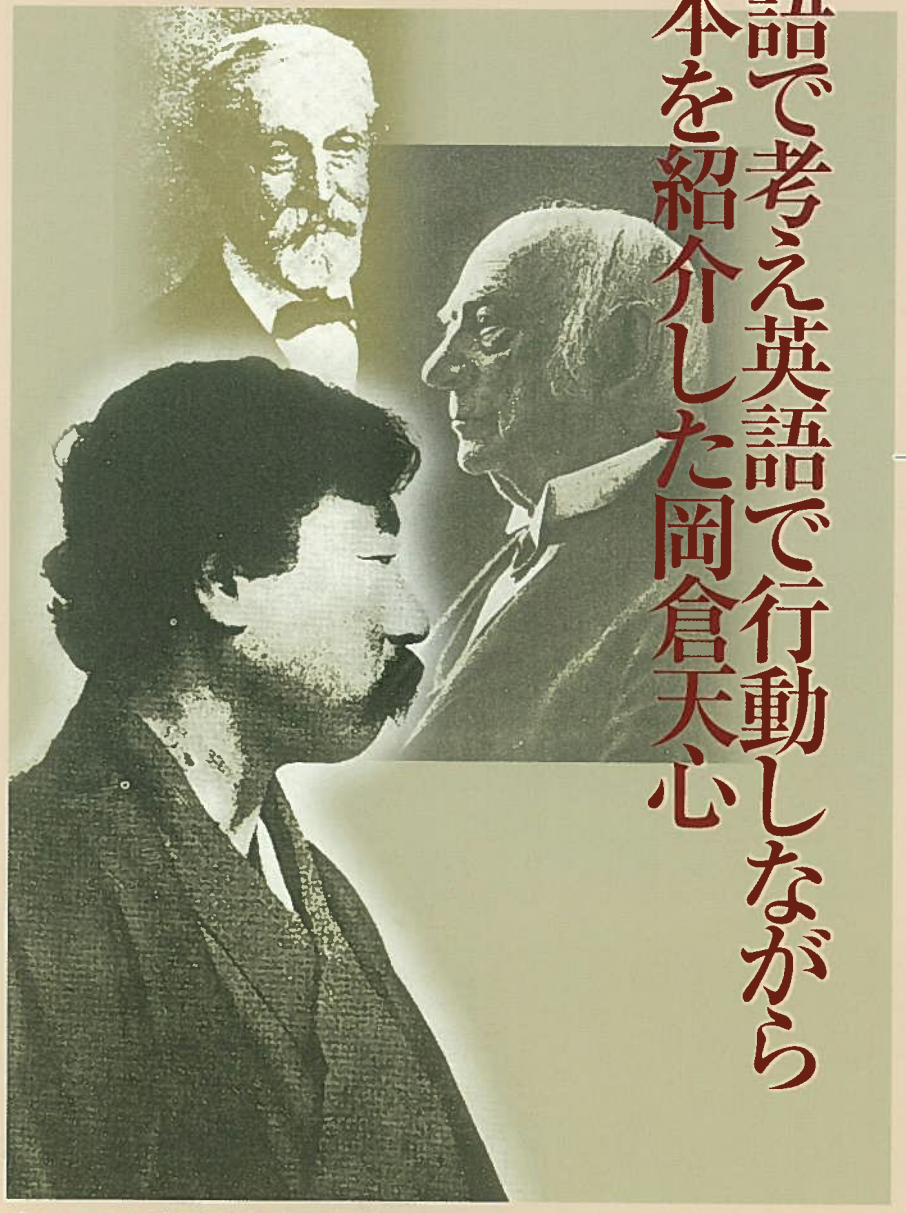
「うつくしスピーキもうやめさんせ恋にハイロウあるじやなし」

「気はストロングでなにいふこともウイーキわたしのをんな気は」

といった具合である。当時の日本人は万次郎先生のレベルから見れば、ずいぶん進歩したようだ。英語を使って恋愛の俗謡まで作るようになったのである。▼

特集
横浜と英語
歴史的大人物の英語力

英語で考え英語で行動しながら日本を紹介した岡倉天心



プロフィール・岡倉天心（おかくら てんしん）
1863（文久2）年、横浜に生まれる。東京帝国大学卒業。90（明治23）年、東京美術学校校長。98（明治31）年、日本美術院創設。1910（明治42）年、ボストン美術館中国・日本美術部長。13（大正2）年没。（写真上はT.H.バラ、右はJ.H.ヘボン）

岡倉天心のことは誰でもが知っている。彼が歴史の教科書に名前を連ねるような大人物であることは疑いようもない。しかし、彼が主要な著作のほとんどを英語で書いたということは案外知られていない。『茶の本』、『東洋の理想』、『日本の目覚め』……。これらはすべて英語で書かれ、外国の出版社から発行された書物だ。英文のタイトルはそれぞれ"The Book of Tea" "The Ideal of the East" "The Awakening of the East"。

ヘボン先生も驚いた英語力

天心こと岡倉覚三は1863年2月14日、横浜に生まれた。生地については諸説があるが、横浜市中区の開港記念会館の脇には「生誕之地」と銘打たれた碑が残っている。天心の父、覚右衛門は息子に英才教育を施し、英語塾に通わせた。覚三少年は、アメリカ人の医師で、宣教師であったジェームズ・ヘップバーンや宮城学院大学の基礎を作ったバラの私塾で英語を学んだ。ヘップバーンは「ヘボン」と呼んだ方が私たちには親しみやすい。明治学院大学の基礎をつくり、ローマ字を開発したヘボンである。

そもそも岡倉家の家業は生糸商で、店頭はいつも外国人で賑わっていたという。「横浜では人力車夫でも英語をしゃべる」という噂さえあった横浜の地で子守歌のように英語を聞いて育った覚三少年の英語力は、ヘボン先生やバラ先生をして「君の英語はまるでわれわれと同じ」と言わしめるほどであった。

ジョークにはジョークで切り返す

覚三少年は東京帝国大学に入学した。当時、東京帝大の講義のほとんどは英語で行われていた。資料によれば覚三は、ヴィクトール・ユゴーの「ああ無情」やデュマ・ペールの「モンテ・クリスト伯」などを英語で読んでいたという。そして同大学を卒業した覚三少年は、高級文部官僚、岡倉天心となった。

鑑賞会の創設に参加した天心は、哲学を講じるために来日したアーノルド・フェノロサ（米・1853～1908）とともに日本美術の復興に尽力した。そして、1890年には東京美術学校の校長に就任した。弱冠二八歳の青年は日本の美術界の頂点へと登り詰めたのである。

1904年、四二歳の天心はボストン美術館中国・日本美術部に入るのだが、そのボストン時代の伝説的な逸話を紹介しよう。

弟子の横山大観とボストンの街を歩いていた天心は現地の若者に侮蔑的に"What sort of 'nese are you? Are you Chinese, or Japanese, or Javanese?"と聞かれた。お前はどんな「ニーズ」なんだ、チャイニーズか、ジャパニーズか、ジャワニーズか？というほどの意味である。

すかさず天心はこう答えたという。"We are Japanese gentlemen. But what kind of 'key are you? Are you a Yankee, or a donkey, or a monkey?"と。お前さんはどんな「キー」なんだい、ヤンキーか、ドンキー（ロバもしくは間抜け者）か、モンキーか？というわけである。機転の利いたとっさの応答が、天心の高い英語力を表している。

現在、天心の著作は日本研究を志す欧米の学者が、まずはじめに手にとる本となっているという。天心の英語力なくしては、浮世絵に代表される日本の古美術がアメリカをはじめとした諸外国で歓迎されるというような状況はありえなかった、と言っても大げさではない。

【参考文献】
斎藤兆史『英語達人列伝』中央公論新社、2000年
新井恵美子『岡倉天心物語』神奈川新聞社、2004年

横浜を詠む

船笛に鳩の飛び立つ十二月

黛まどか
写真　森日出夫

クリスマスから年の暮れにかけての横浜は、わけても港町情趣が溢れ、美しさが際立つ。大きなツリーが飾られた教会、ボインセチアで彩られた外国人墓地、時折街中に響く船の汽笛が、年惜しむ気持ちを募らせる。昨年久しぶりにクリスマスを横浜で過ごした。昼下がりの山下公園は人もまばらで、冬薔薇がひっそりと咲き競っていた。

私は二十三年前のクリスマスを思い出していた。氷川丸も公園のベンチも当時のままだ。イヴだというのに恋人と喧嘩をし、はぐれてしまった。ケータイなどない時代だから、ついに会えず仕舞いで終わったクリスマス・イヴ。船笛にふっと我に返ると、足元にたむろしていた鳩が、いっせいに歳晩の空に飛び立っていった。▼

プロフィール・黛まどか（まゆずみ まどか）
俳人。神奈川県生まれ。1994年「B面の夏」50句で第40回角川俳句賞奨励賞を受賞。俳句結社「月刊ヘップバーン」（http://www.hepburn-575.com/）代表。2002年、句集「京都の恋」にて第2回山本健吉文学賞受賞。主な句集に「くちづけ」。最新刊「17音の交響曲」（東京書籍）。

プロフィール・森 日出夫（もり ひでお）
横浜生まれ。JPS（日本写真家協会）所属。横浜を代表する写真家。自ら撮り続けている横浜の港・街・人を「森の観測」と名づけ、それらの作品を写真集・個展に多数発表。ニューヨークADC賞受賞、他。横浜文化賞奨励賞受賞。

スローフードの極意はうまいものにこだわること

横浜スローフード協会会長
松信 裕さん

スローフードという運動はもともとイタリアで1986年に生まれたものだ。きっかけはローマにマクドナルドが出店されたこと。ファストフードの「いつでもどこでも同じ味」というのも悪くないが、それだけでは面白くないという運動だ。現在は世界中にこの運動が広まって、45カ国にスローフード協会というのがある。日本にも38のスローフード協会がある。横浜スローフード協会の会長である有隣堂社長、松信裕さんにお話をうかがった。

地産地消で、質と生産者と子どもを守る

「消えゆく恐れのある伝統的な食材や料理、質の良い食品、酒を守る。質の良い素材を提供する小生産者を守る。子ども達を含め、消費者に味の教育（食育）をすすめる。この三つを基本理念としています。地元で生産されたものを地元で消費することを私たちは「地産地消（ちさんちしょう）」と呼んでいますが、顔の見える生産者がつくったものを新鮮なうちに食べれば流通コストも省けますし、安心して食べることができます。そういったことを熱心に広めようというのがスローフード運動なんです。

いろいろと理論的・理念的なこともあるのでしょうが、正直申しまして私はたんに『うまいものが食べたい』。それだけのことでやっています（笑）。いま横浜スローフード協会のほかに『横浜焼酎委員会』の会長というのもやっていますが、それも同じで『うまい酒が呑みたい』だけ。うまいものをガバーッと食べて、ゴンゴン呑みたい（笑）。そういった情熱については人後に落ちないつもりです（笑）。その情熱が続く限りは、私が会長という役職に適任かどうかは別にして、メンバーとしては有資格者だと自覚しています」。

スローフードで夫婦円満

単純だが、本質的な喜びがスローフードという運動の根本にあると松信さんは語る。

「生命さえ維持されれば食べるものは何でもいいというのは寂しいことです。人生の面白みが半減するというものです。魚にしても肉にしても野菜にしても、本来の味のするもの、そして安全なものを食べて、うまい酒を呑みたい。それが原点です。スローフードの本拠地であるイタリアでもきっとそれは同じなんだろうと思っています。それと不思議なことに『うまいもの』を食べていると夫婦喧嘩もしない（笑）。うちもかみさんと二人で台所に立って魚でも下ろしていると喧嘩しませんから。食べ物の結ぶ縁というのは強いんですね。食べるというだけでなくて『つくる喜び』というのも重要だと実感します」。

神奈川にもうまいものはたくさんある

横浜スローフード協会は昨年に引き続き、今年も4月29日に「よこはまスローフードフェア」というイベントを開催した。横浜スローフード協会の考えに賛同した26の事業者が出展し、二千人近いお客さんが集まった。

「横浜はどちらかというと消費地ではありますが、神奈川県ということで探すとずいぶんたくさんの生産者の方々がいらっしゃいます。私はご挨拶もそこそこに、両わきがいっぱいになるほど『うまいもの』を買いこんで、大いに楽しみました。このフェアは来年の春の開催も決定しています。近年は若い女性の来場者が多いことが特徴的です。若い女性は流行に敏感ですから、スローフードがひとつのライフスタイルになりつつあるということの証左だと思っています。

焼酎の方も同じ傾向にありますね。若い人が食べ物にこだわったり、いも焼酎なんかを大喜びで呑んでいるのを見ると愉快です。これからも楽しみつつ、この運動を広めたいなと改めて思います」。▼

4月29日にパシフィコ横浜で開かれた「スローフードフェア2005」の模様

横浜への愛が環境への取り組みにつながっています

株式会社たまき社長
玉置晴美さん

株式会社たまきのキーワードは「エコロジー」、「環境」だ。環境を重視した製品開発を通した社会貢献を意識して事業展開をしている。

たまきの事業の大きな柱は制服のネクタイやリボンの製造・販売。実は、官公庁や一般企業、学校法人で着用されているユニフォームのネクタイのうち、かなりのシェアを占めている。いわばユニフォーム業界のガリバーである。具体的な社名は出せないが、えっ！　あれも、これも、それも……と、たまきの製品は身近にあふれている。

それらのネクタイには繊維をリサイクルする「ケミカルリサイクル」という特殊な技術を使用して作られた糸が使われている。循環型社会（エコサークル）の実現の一助になればと考えた結果だそうだ。

「循環型社会といっても、人が快適に、そして安全に使うことができなければ意味がありません」。

製品開発を通した社会貢献という企業使命が如実に表れている。

生活者の視点で開発

たまきの事業のもうひとつの展開

に「アミノ酸生活」がある。これは自宅で衣類などにアミノ酸加工を施すことができるというもので、消費者から好評を得ている商品だ。

こぼしてもしみない繊維

お肌に優しいアミノ酸

今でこそ飲料を中心に一般化したアミノ酸だが、たまきがそれに着目したのは一五年前。以降一貫して研究開発を続けてきた。

きっかけはシルクの衣料を洗うのに適した物質はないかと色々模索していたことだった。アミノ酸は、シルクのように敏感な素材を洗うのに適している。アミノ酸で洗うと、ふんわりと肌に優しく仕上がるからだ。そこでアミノ酸の加工を繊維に施すことはできないかと考えて生まれたのが「アミノ酸生活」である。

「『アミノ酸生活』は弱酸性のアミノ酸が主な成分なので、一般的な柔軟剤と違って肌に優しく仕上がります。肌の弱い方や子どもでも安心して使えるわけです」。

また、肌触りがよくなるので、ゴワゴワしがちなジーンズの加工にも最適だ。さらにアミノ酸は生分解性が高いので川に流しても害毒にならないし、すぐに自然に戻るという利点もあるという。

社会的責任への取り組み

こうした事業展開の基本にあるのは、横浜への愛情だと玉置社長は言う。

「この半世紀のあいだ、父の代からここ横浜で事業を展開してきましたし、私自身も横浜生まれの横浜育ちです。横浜は水の街で、海に面しているし、たくさん川も流れています。その横浜の水を汚さないために私たちにできることは何か？　ということを企業として常に考えなくてはいけないと思っているんです」。

近年はアメリカのナノテックス社と契約を結び、撥水・撥油加工を施したネクタイを製品化した。

これはナノのレベルで繊維を加工するという技術で、風合いや手触りはそのままに撥水・撥油加工ができるという効果がある。たとえばネクタイやリボンにコーヒーなどをこぼしてもきれいにはじいてくれるという、うれしい機能だ。しかも、アイロンなどで熱を加えると撥水・撥油効果が回復するので、長く使えるという製品特徴を持っている。

こうした新しい技術も積極的に取り入れながら、「水の街としての横浜を大事に守っていきたいと考えています」。

浜っ子の社長はどこまでも前向きである。▼

横浜を聴く

柳ジョージ『AREA2〜永遠のあの夏へ』に活写された本牧の風景

東谷 護

僕らは日々の生活に身をゆだね、自分の身近にあるものに気を留めることもなく過ごしてしまうことが多いものだ。時が流れたことすら気がつかないこともある。あるとき、ふとしたことでこうした自分の視野に入っていながらも、気にもかけなかったものに目をやると、おのれの記憶にあったものは探しても見当たらず、眼前には違う風景が現れ、驚きを隠せない自分がいる。

自分の思い出を手繰り寄せたり、写真を手がかりに過去を蘇らすこともあれば、テレビに映し出された古い映像や耳に聞こえてくる懐かしいメロディーが「あの頃」に僕らを誘うこともある。

「あの頃」に流れていた曲や「あの頃」を歌った歌詞が、現在を生きる僕らに過去と対話するきっかけをつくってくれることがある。このような働きをしてくれる流行歌のなかで横浜をテーマにしたものは多い。ここでは、横浜をテーマにした歌詞を手がかりに、懐かしい景色に思いをめぐらす旅に出てみよう。

古い町並み本牧タウン
溢れてたRhythm and Blues
今では他人のようなすまし顔

この歌は柳ジョージの《AREA2〜永遠のあの夏へ》（1993年）の一節だ。エリア2とは、エリア1とともに戦後、本牧地区にあった米軍に接収された地域の名称である。他には根岸台のエリアXをはじめとし、日本人の立ち入りが禁止された空間が横浜には数多く存在した。

柳ジョージの歌った「溢れてたRhythm and Blues」という景色は、1960年代半ばと思われる。この頃に、GS（グループ・サウンズ）がもてはやされ、ザ・ゴールデン・カップスは異彩を放っていたものの、ジャンルという枠ではその流れのなかにいた。グループ名と同じ店のネオンが、今でも本牧の夜に華を添えている。

軍施設、軍人用の住宅地として終戦後まもなく衣替えさせられた日本人立ち入り禁止の米軍接収地は、オフリミットと呼ばれフェンスで囲まれた。フェンスが「アメリカ」と日本の国境の役割を果たした。この独特な風景を柳ジョージは《FENCEの向こうのアメリカ》（1979年）で歌った。

AREA ONEの角を曲がれば
お袋のいた店があった
白いハローの子に追われて
逃げて来たPXから
今はもう聞こえない
お袋の下手なBLUES
俺には高すぎた鉄のFENCE（略）
高いFENCE越えて観た
AMERICA

（JASRAC 出0513357−501）

エリア1とエリア2は、主に米軍人用の居住地だった。フェンスの向こうには鮮やかな芝生の緑が広がっていた。戦後、混沌とした日本社会に住む者たちにとっては、特異な空間だったことに相違ない。フェンスの向こうの「アメリカ」では一体、何があったのだろうか。「アメリカ」は物資豊かな国の象徴として圧倒的な強さを日本人に見せつけたことだろう。憧れの存在としての役割を担った時期も確かにあった。円高ドル安という言葉と程遠かった時代に、「高いFENCE越えて観たAMERICA」を実感として体験した者たちも、今では人生の冬を迎えている。柳ジョージが歌ったエリア1とエリア2は、接収地が日本に返還された現在では、マイカル本牧や新しい住宅街となっている。そこには「アメリカ」の匂いもなければ、かつての強大国アメリカの威勢もない。今では歌詞に残された懐かしい響きとなってしまった。

筆者プロフィール
東谷護（とうや まもる）
1965年、横浜市生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程修了。京都大学博士（人間・環境学）。現在、東京工業大学、成城大学講師。専攻は音楽社会史、歴史社会学。著書に『進駐軍クラブから歌謡曲へ』（みすず書房）、『ポピュラー音楽へのまなざし』（編著・勁草書房）、『ブラスバンドの社会史』（共著・青弓社）、『ポピュラー音楽とアカデミズム』（共著・音楽之友社）など。

東谷護著『進駐軍クラブから歌謡曲へ　戦後日本ポピュラー音楽の黎明期』（みすず書房、2800円）

本書は、占領期にフェンスの中の「アメリカ」で行われていた音楽を考究したものである。当事者への取材など一次資料を駆使した成果が、今まで詳述されることのなかった戦後日本ポピュラー音楽の形成の原点を鮮やかに浮かび上がらせている。音楽愛好者そして戦後史に関心のある読者にとって貴重な書。

横浜ジェリービーンズ倶楽部通信

「横浜ジェリービーンズ倶楽部」は、横浜のマーケティングを実践することを目的とする横浜信用金庫内のプロジェクトチームです。同倶楽部では、地域情報誌『横浜ルネサンス』を発行し、「横浜のニックネーム」「横浜のキャッチフレーズ」の公募などを行ってきました。そして、横浜のニックネームは「ジェリービーンズ」、キャッチフレーズは「150年前から流行ってます。」を採用しました。この倶楽部の活動は金融機関としては唯一、横浜観光プロモーションフォーラムの認定事業となっており、2004年には財団法人横浜観光プロモーションフォーラムから特別功労者として表彰されました。

お問合わせ先 〒231−8466横浜市中区尾上町2−16−1 横浜信用金庫 総合企画部
TEL:045−651−1451(代) FAX:045−651−2303
E-mail:jbeans@yokoshin.co.jp

■第8回「信用金庫社会貢献賞」を受賞

会長賞に贈られたブロンズ像

横浜信用金庫の80周年記念事業の一環として2002年から展開してきた「横浜ルネサンス事業」が、第8回「信用金庫社会貢献賞」の会長賞を受章しました。そして、その表彰が2005年6月23日に全国信用金庫協会通常総会の席上で行われました。「信用金庫社会貢献賞」は、毎年、全国の信用金庫および信用金庫役職員（個人、支店、グループ）のほか、地区・府県信用金庫協会、中央団体等から広く募集し、審査のうえ、表彰を行っているものです。「横浜ルネサンス事業」は、横浜信用金庫の80周年記念事業としてスタートし、2002年から地域情報誌「横浜ルネサンス」の発行を開始しました。

2002年には第1号「集（つどい）」、第2号「商（あきない）」を、2003年には第3号「創（つくる）」を発行しました。当初から市販を考えて編集しており、3冊の増補改訂版を単行本「横浜ルネサンス」としてダイヤモンド社から発行、全国の書店で販売しました。

その後、横浜のマーケティングリサーチをテーマに「横浜のニックネーム」「根岸線・駅の歌」などを公募し、横浜のニックネームに「ジェリービーンズ」、キャッチフレーズに「150年前から流行ってます。」を決定しました。そして、その結果を分析レポートとして「横浜ルネサンス」第4号に掲載しました。「横浜」は全国でも有数の地域ブランドであり、それを前面に打ち出した企業プロモーションは大きな話題を集めました。

80周年記念事業終了後も、横浜のマーケティングを実践する「横浜プロモーション部会」（横浜ジェリービーンズ倶楽部）を金庫本部内に組織し、横浜観光プロモーションフォーラム認定事業として〈横浜プロモーションプランコンテスト〉など、さまざまな事業を展開しています。（注）

【注】〈横浜プロモーションプランコンテスト〉は、市内に本部を置く9大学を中心に短期大学も含めて大学に在学中の方に、「2009年に開港150周年を迎える横浜」を対象商品として、横浜を広く内外にアピールするプロモーションプランを考えていただくものです。

■横浜馬車道 FRANCE プラン

横浜信用金庫・横浜ジェリービーンズ倶楽部は「横浜フランス月間・2005」の参加事業として、2005年6月25日（土）午後1時からみなとみらい線馬車道駅地下1階で「横浜・馬車道 FRANCE プラン」を実施しました。これは、さまざまな「フランス」を横浜で実現するというコンセプトのもとに、会場をフランスの料理・音楽等で埋めつくすというイベント。参加企業は、馬車道十番館様（フランス料理）、ビストロパリ17区様（フランス料理）、サモアール様（スイーツ）、キリンビール横浜支社 様（ワイン他）、Vie De FRANCE様（パン）。料理は300円から500円程度で提供されたほか、N・U・（エヌユー）ジェリービーンズコンサートや野毛大道芸などで活躍するマジシャンによるテーブルマジックも行われました。

■横浜信用金庫とアコースティックフォークデュオ N・U・のコラボレーション

横浜観光プロモーションフォーラムの認定事業として「横浜ジェリービーンズ倶楽部」は、同じく認定事業「横濱物語」を展開するN・U・と協同して横浜のプロモーションや地域貢献活動を実施しています。

これまで、横浜スローフード協会さんや横浜発祥の企業キリンビール（横浜支社）さんのご協力を得て、次のような活動を行ってきました。

〈N・U・よこはまスローフードフェア2005・コンサート〉
日時＝2005年4月29日（金）第1回11時30分〜第2回12時30分〜会場＝パシフィコ横浜 国立大ホール1階マリンロビー

〈N・U・キリンビアビレッジGWイベント・ミニライブ〉
日時＝2005年5月4日（水）第1回13時〜第2回15時〜会場＝キリンビール横浜工場内キリンビアビレッジヒルトップガーデン

■「花日記」

花のある生活の普及を呼びかけ、「花療法研究家」として活動している片桐義子さんが、自然史植物画研究会とともに手がけた美しく小さな本。「花療法」とは、著者が大病をきっかけに、植物の「気」に注目し、東洋医学をベースに体系化した独自のセラピー。

季節を彩る三六六種の花に、それぞれ花言葉が添えられ、丁寧な解説が施されている。すべての花には自然史植物画研究会による端正な細密画が寄せられ、手にとって眺めているだけで楽しい。いつもかたわらに置いておきたい、そんな一冊である。神奈川新聞社から絶賛発売中。

定価1200円+税

ジェリービーンズ通帳&キャッシュカード近日リリース!!

横浜信用金庫から、横浜のニックネーム「ジェリービーンズ」をデザインした、オリジナル通帳とキャッシュカードが発行されます。お問合わせは、横浜信用金庫　業務部[TEL.045-651-1451(代)]まで。

横浜ルネサンス　No.6

2005年11月1日発行

発行——横浜信用金庫
〒231-8466 横浜市中区尾上町2-16-1
Tel.045-651-1451(代) Fax.045-651-2303
http://www.yokoshin.co.jp

編集——横浜信用金庫総合企画部
〈横浜ジェリービーンズ倶楽部〉

制作・デザイン—PortSide Statoin Co., Ltd. + Basis Inc.

表紙撮影——高橋　晃

©横浜信用金庫 Printed in Japan 本誌記事の無断転載・複写を禁じます
本誌に関するお問合せは、横浜信用金庫総合企画部:045-651-1451(代)まで

横浜観光プロモーションフォーラム

横浜の観光・コンベンションに携わる約180の企業・団体・市民事業所からなる組織で、横浜への来訪者を増やすことを目的として活動しています。「横浜ルネサンス」を発行する「横浜ジェリービーンズ倶楽部」事業は、同フォーラムの認定事業となっています。

横浜開港150周年

横浜のキャッチフレーズ

「150年前から流行ってます。」

寒村だった横浜村は、1859年の開港によって一気にブレイクし、
成長・発展を続けて、人口350万人を超える大都市となりました。
横浜は2009年に開港150周年を迎えます。

横浜信用金庫